

地域に伝わる昔ばなし・民話をみんなの手で伝えよう

地域と区役所が一緒に創る・金沢の昔ばなし紙芝居完成！

金沢区は鎌倉時代から交通の要衝として栄えてきた歴史豊かな土地です。歴史的資産となる寺社も多く、地域には様々な面白い民話が伝承されています。

地域に伝わる民話を、地域の手で、次世代に繋いでいくことを目指して、金沢区民活動センターつながりステーションと金沢区が連携し、地域に伝わる民話・歴史をモチーフとした紙芝居を作成しました。

歴史紙芝居お披露目イベント「みんな集まれ！金沢の昔ばなし紙芝居」を皮切りに、地域と連携した歴史・文化の普及を一層推進していきます。

金沢の昔ばなし紙芝居

金沢区の民話や歴史をモチーフにした紙芝居です。

「NPO 法人さくら茶屋にししば」で制作した“赤い井戸”“身代わり観音”、“コミュニティ・サロン ほっこり”（湘南八景自治会）で制作した“くつもの狐”、金沢区役所で制作した“金沢八景ふしぎな浮世絵”“塩なめ地蔵と朝夷奈切通”の 5 作品。時代・地域の異なる多様なストーリー・イラストで、金沢の歴史を体感できます。

（内容等の詳細は別紙をご参照ください。）



「赤い井戸」より

配布：区内の小学校・地区センター・コミュニティハウス・図書館等の施設に配布（一部施設で貸出）

配布開始日：平成 27 年 3 月 16 日（月）より順次配布

紙芝居お披露目イベント「みんな集まれ！金沢の昔ばなし紙芝居」

作成した昔ばなし紙芝居をお披露目するイベントを開催します。

上演するのは「赤い井戸」「身代わり観音」「くつもの狐」の 3 作品。作者や作成秘話などのご紹介も合わせて行います。

子どもから大人までみんなでお楽しみいただけるイベントです。

日程：3 月 23 日（月） 14 時～15 時 30 分

場所：金沢区民活動センター “ゆめかもん” フリースペース

申込：直接会場にお越しください。



金沢の昔ばなし紙芝居パネル展

3 月 9 日（月）から 3 月 20 日（金）まで、お披露目イベント「みんな集まれ！金沢の昔ばなし紙芝居」のプレイベントとして、金沢区役所 2 階区民ホールに紙芝居を展示します。

金沢区民活動センター及び金沢区民活動センターつながりステーションの紹介も行います。

金沢区民活動センター つながりステーションとは

金沢区の市民活動・生涯学習の拠点である金沢区民活動センター「ゆめかもん」の地域拠点です。

身近な居場所として、相談、情報発信、イベント等を実施。みなさんの活動をサポートし、地域の交流の輪を広げます。



さくら茶屋にししば

いつでも、だれもが、好きな時間に食事やおしゃべりができる場所を作りたい…という想いからできたサロンです。カフェのほか、地域の見守り活動や子どもの居場所づくり、趣味の教室など、地域に根付いた様々な活動を展開しています。

住所：金沢区西柴 3-17-6

電話：045-516-8560

営業時間：11時～17時

定休日：日



コミュニティ・サロン ほっこり

住み慣れた街でいつまでも安心して暮らせることを目指し、湘南八景自治会が2012年に開設したコミュニティ・サロンです。誰もが気軽に立ち寄れる居場所として、また、地域の多世代交流の場として、「いこい」と「ふれあい」を提供しています。

住所：金沢区東朝比奈 2-2-32

電話：045-786-3736

営業時間：10時～16時

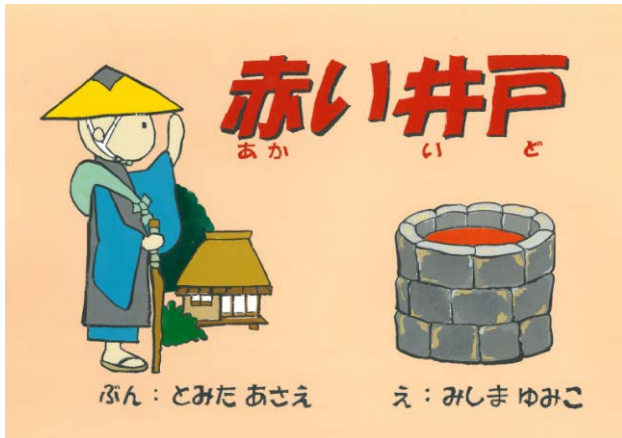
定休日：日・月・祝



お問合せ先

金沢区地域振興課学校支援・連携担当課長 西田 浩久 Tel 045-788-7799

赤い井戸



制作

さくら茶屋にししば（金沢区西柴3-17-6）

あらすじ

金沢七井（しちせい）のひとつ、釜利谷地区にある正法院の赤井戸にまつわるお話です。

今から1200年前、疫病に見舞われ苦しんでいた釜利谷の地にひとりの修行僧が立ち寄りました。

修行僧は井戸を掘らせ、その水を祈祷し赤く変えたのです、その水によって疫病を退散させました。その僧は、後の弘法大師・空海であったということです。

作者紹介

文：富田あさえ（主婦・さくら茶屋スタッフ）

元になる本もあるからと簡単に引き受けた紙芝居作りでしたが、いざ始めてみると……。資料を調べ直したり、文章を手直したりと5, 6回は書き直す羽目になりました。素晴らしい絵のおかげで完成してほっとしています。たくさんの人に楽しんでいただけたら幸いです

絵：三島佑実子（学生）

さくらカフェでお手伝いをしています。日々、練習の毎日を送っています。金沢区に住んで10年以上になりますが、紙芝居制作に参加し、知らないことの多さに驚きました。大変勉強になりました。

絵：前田恵美子（主婦）

西柴に住んで約40年あまり、子育てを終え、今はさくら茶屋の活動を楽しんでいます。若いころを思い出し、とても楽しく作成することができました。わくわくどきどきの制作の時間でした。

身代わり観音



制作

さくら茶屋にししば（金沢区西柴3-17-6）

あらすじ

現在、称名寺に安置されている、『海中出現観世音菩薩』にまつわるお話です。

今から700年ほど前に長浜を大津波が襲いましたが、村人全員が無事助かりました。しかし、村人の身代りになるかのように、観音さまが流されてしまいました。

それから40年後、柴の漁師が海中で光る観音さまを見つけ出し、再び手厚くお祀りしたということです。

作者紹介

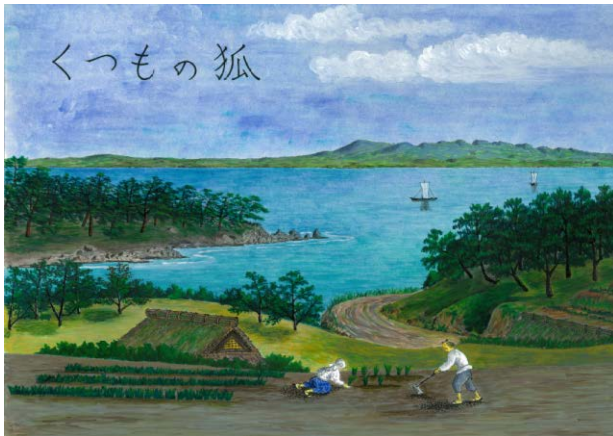
文：富田あさえ（主婦・さくら茶屋スタッフ）

元になる本もあるからと簡単に引き受けた紙芝居作りでしたが、いざ始めてみると……。資料を調べ直したり、文章を手直したりと5, 6回は書き直す羽目になりました。素晴らしい絵のおかげで完成してほっとしています。たくさんの人に楽しんでいただけたら幸いです

絵：上野修世（主婦）

金沢区には昔から伝わっている民話がいくつかあることを今回初めて知りました。身代り観音が称名寺にお祀りされていることにもこれまで気づきませんでした。紙芝居を描くために称名寺を訪れ実物を拝見し、改めて歴史の町であることを実感しました。

くつもの狐



制作

コミュニティ・サロン「ほっこり」（金沢区東朝比奈2-2-32）

あらすじ

現くつも（現在の富岡総合公園付近の旧地名）の農夫、彦蔵じいさんは、ある日峰の灸に出かけますが、帰る途中で日が暮れ、路に迷ってしまいます。

大きな屋敷を見つけ助けを乞うと、現れたのは鄙には稀なる美しい女性でした。

翌朝じいさんが畑の中で、もがくようなしぐさをしているのが発見されます。じいさんは狐にばかされてしまったようです。

雪の降る晩、山いぬに追われて逃げてきた女狐をじいさん夫婦が助けてやります。

そしてある夏の日、女狐は美しい女性に化け、老夫婦のところに土産をもってお礼にやって来ます。

作者紹介

文・絵：藤井俊男（ほっこりスタッフの夫）

イラスト・ストーリーとも、作者は元中学・高校の理科教師をしていた60代の男性です。

妻が「ほっこり」の調理スタッフとして活動している中で紙芝居の話しが舞い込み、興味があったので取り組むことにしました。

（この話の舞台になった地域は、私が少年だった頃には山林と畑が広がる田園地域でした。おそらく江戸時代の末期と、さほど変らぬ風景が至る所に残っていたのだと思われます。時々、昔のことを懐かしみながら、この地域をぶらついていきます。）

工夫したポイント

この紙芝居のもとになったのは富岡地区の昔話ですが、彦蔵じいさんが峰の灸へ行き、帰る途中で狐にばかされたという、どこにでもありそうなものです。

紙芝居に仕立てるには短すぎるので、役人や庄屋（本来ならば名主とすべきかも知れませんが）、そして美しい女性を登場させ、話をふくらませました。

もとの昔話としては、かなり趣が違ったものになってしまったようです。

また、絵については、なるべく季節の変化を感じさせるように心がけて描きました。

金沢八景ふしぎな浮世絵



制作

ストーリー：金沢区役所 昔ばなし紙芝居プロジェクトチーム

イラスト：村井由紀子

あらすじ

金沢八景の浮世絵を見ていたかいとくん。その浮世絵に、かいとくんが飼っている三毛猫カナカナが吸い込まれてしまいます。かいとくんの秘密基地・牡丹園から出てきたぼたんちゃんはいとくんと一緒に江戸の世界にひとつ飛び。浮世絵を描いた歌川広重と一緒に、浮世絵の世界を巡りながらカナカナを探します。

金沢八景のうち、「平瀧落雁」「称名晩鐘」「野島夕照」「瀬戸秋月」4つの勝景を皆で一緒に巡ります。なかなか見つからないカナカナでしたが、行きついた料亭で発見し、月を見ながら皆で美味しく月見団子を食べました。

紙芝居にまつわるエピソード

①金沢八景

金沢の8つの勝景をあてはめたもので、元禄の頃に心越禅師が能見堂から金沢の眺望を中国の瀟湘八景になぞらえて命名したと伝えられています。作品に出てくる「平瀧落雁」「称名晩鐘」「野島夕照」「瀬戸秋月」のほか、「洲崎晴嵐」「小泉夜雨」「乙壱帰帆」「内川暮雪」の4つがあります。

金沢八景をモチーフにして、多くの浮世絵や絵葉書が発行されましたが、特に歌川広重の描いたものが有名で、このストーリーでも歌川広重が描いた浮世絵を忠実に再現しています。

②金沢猫

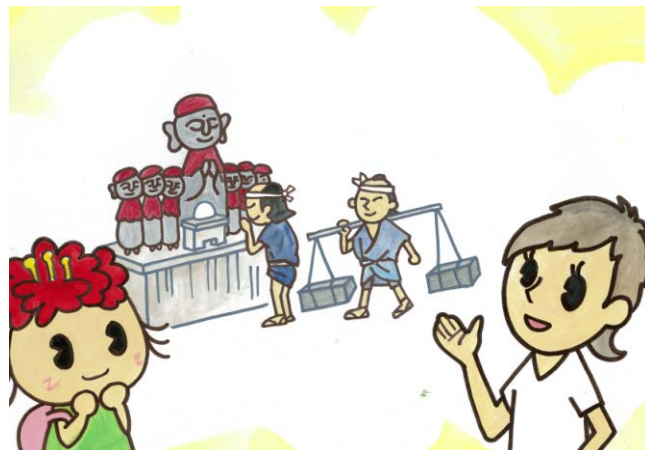
この作品で登場する猫「カナカナ」は、金沢の民話「金沢猫」をモチーフとしています。

金沢猫は、今から約800年前、唐（今の中国）から三艘（今の平瀧湾）に船がやってきた際に乗り合わせていた唐猫です。船が唐に戻る際に船に戻らなかったため、唐には帰れませんでした。その後日本で村人の優しさに包まれて暮らし、多くの子孫を残しました。

この猫は、当時珍しい尻尾の短い三毛猫でした。背中を撫でると普通の猫とは反対に背中を持ち上げるので、可愛いと珍しがられ、その愛らしさから「カナカナ」と呼ばれ、評判になりました。

千光寺（六浦）に供養のための「猫塚」が今でも残されています。

塩なめ地蔵と朝夷奈切通



制作

金沢区役所 昔ばなし紙芝居プロジェクトチーム

あらすじ

金沢の民話、「塩なめ地蔵」を現代版にアレンジしたお話です。

金沢区の幸せお届け大使「ぼたんちゃん」は鎌倉への遠足の途中、暑くてみんなからはぐれてしまいます。一休みしていると、なんとお地蔵様が話しかけてきました。飲み物屋さんや大福屋さんをみつけたぼたんちゃんは、買った大福をお供えして、皆に合流しました。

帰り道、再度お地蔵様の目の前を通ったところ、お供えしたはずの大福がありません。先生に聞いたところ、それは「塩なめ地蔵」だと教えてくれました。

紙芝居にまつわるエピソード

①塩なめ地蔵

今から800年程昔、当時海に面していた釜利谷、洲崎、町屋、六浦、野島など、殆どの村では塩づくりが盛んでした、人々は朝夷奈切通を超えて、鎌倉まで塩を売りにっていました。

重い荷物を持って峠を越えていくのは大変で、皆峠の上のお地蔵様の前で一休みしました。「今日も売れますように」とお地蔵様に塩を一つまみしてお供えしてお願いごとをしたところ、塩がよく売れました。

帰りにお地蔵様の前でお礼をすると、朝お供えしたはずの塩がありません。皆同じ経験をしたことから、この地蔵様は「塩なめ地蔵」と呼ばれるようになりました。

②ぼたんちゃんと牡丹の花

この作品の主人公「ぼたんちゃん」は、牡丹の花をモチーフとした金沢区のキャラクターで、金沢区の魅力アップや区民の皆さまのつながりを強めるお手伝いをする幸せお届け大使として活躍中です。

江戸時代に泥亀新田の開発を行い、製塩で成功した、永島家の牡丹が特に有名で、長い間、「金沢の牡丹」「泥亀の牡丹」として楽しまれてきました。金沢区制45周年記念に一般公募して区の花として選定されました。